

# 自由主義經濟學と社會政策

—未定稿・社會政策學研究歷史篇・其の一—

南 亮 三 郎

## 第一節 序

説

イギリス古典派經濟學即ち自由主義經濟學は普通に、アダム・スミスに始まつてマルサス及びリカアドウを経  
ジョン・ステュアート・ミルに至るところの、—これを年代にして十八世紀末葉から十九世紀央ばにかけての、  
おほよそ七十年を現實の活動期間とされてゐるが、この期間は恰かもイギリス産業革命の初端・進行・完結の時  
期に當つてをり、謂はゆるイギリス大産業の「嵐と熱狂の時期」(一七九七—一八一五年)をその中心として、初  
期に於いては機械制大工業以前のマニファクチュア工業時代に連らなり、後期に於いてはフランスの七月革命  
(一八三〇年)を契機とするヨーロッパの全面的な階級闘争の成長時代を、その背景としてゐる。従つて、俱に  
ひとしく古典學派の名稱下に一括されてをるにしても、産業革命の初端期・マニファクチュア時代の代表者た  
るアダム・スミスと、機械制大工業の完成期に屬するマルサス及びリカアドウと、更には階級闘争の全面的な成  
長時代に生ひ立つたジョン・ステュアート・ミルとの間には、それぞれ理論構成の上に大きい隔たりがある。

アダム・スミスはその全生涯を十八世紀に置いてゐただけ、この世紀に特徴的な啓蒙哲學から出發して經濟生  
活を解明し、個人の利己的活動と自由競争とに永遠の眞理を見出すことによつて近代經濟學の大伽藍を築造し

た。一切の哲學の臭ひを經濟理論から振ひ落したのはリカアドウであるが、しかし彼は彼れの同時代人にして若干の年長者たるマルサスとともに、その眼前に於いてすでに完成せられたる近代的生産方法を永久化することによつてスミスの衣鉢を承けつぎ、より強固なる理論的基礎の上に自由主義經濟學を完成したのである。これによつてスミスと、マルサス及びリカアドウとの理論構成上の一般的異同を特徴づければ、現存の經濟的諸關係を永久化しそれを自然的・非歴史的範疇で握み取らうとする點に就いては略ぼ共通であり、そして正にその點に古典派經濟學の本質的特徴が存するのであるが、スミスは哲學から出發してその點に達したるに反し、マルサス及びリカアドウは完成しつつある近代的經濟諸關係の中に立つて此の現存諸關係の分析から發足して行つた點が、前時代のスミスと異なるのである。アダム・スミスー及び重農派諸學者を合せて一によつて構想せられたる「此の新たる科學は、その時代の諸關係や諸要求の表現ではなくて、永久の理性の表現であつた。彼等の發見した生産や交換の法則は、かかる活動（生産や交換）の或る歴史上一定の形態の法則ではなくて、永遠の自然法則であつた。彼等はそれを人間の自然（人間性）から導き出したのである。」（Engels, Herrn Eugen Dührings *Umwälzung der Wissenschaft* 12. Aufl. S. 154—155.）

しかるにリカアドウに於いて頂點に達した古典派經濟學は、早くも一八三〇年代に重大なる危機に衝き當つた。すなはち、この年とともに市民階級はフランスとイギリスとで政治的權力を奪取したが、他方、今まで知られなかつた近代的階級闘争は、實踐的にも理論的にも益々はつきりした脅威的形態を取るに至つた。フランスの七月革命と呼應してイギリスでは一八三〇年に農村暴動が起り、越えて一八三一年にはリオンで世界最初の労働者の蜂起が見られた。社會情勢のこの急激なる變化は——大塚金之助教授の嘗ての表現を藉りるならば——古典派經濟學にとつて恰かも「死の鐘」を鳴らすが如くに響いた。ジョン・ステュアート・ミルは正にこの歴史的時期に

物を考へたのである。彼は無論單なる俗流經濟學的辯護論者ではなくて、スミス・マルサス・リカードの正系を嗣ぐ一方、これを新興の勞働者階級の要求に結びつけようと試みた一大體系家であつた。しかしミルの經濟學はそのため、一般的構造に於いても個々の理論に於いても、收拾しがたき自家撞着と「無精神な折衷主義」とに陥り、古典派經濟學・自由主義經濟學の大伽藍は遂にここに、自からの手によつて謂はば一種の「破産宣言」を表はすの已むなきに立ち至つたのである。(附言するが、ミルの「經濟學原理」初版の出たのは一八四八年であるが、この年は國際勞働運動の最初の宣言たる「共產黨宣言」の刊行の年に當つてゐる。)

さて我々はこれだけを準備操作として、進みて個々の論者につき、社會政策的問題が如何に取扱はれたかを検討す<sup>90</sup>。(Vgl. Westphalen, Die theoretische Grundlagen der Sozialpolitik. Jena 1931. S. 7 ff.)

## 第二節 アダム・スミス

アダム・スミス(Adam Smith 1723—90)は經濟學者であるよりも前に、倫理學者であり哲學者であつた。「國富論」(一七七六年)は初めて一獨立科學としての經濟學の存在を宣明したものであるけれども、スミスの腦中に於いてはそれ自身、一大哲學體系の一部を構成するものであつた。従つて我々は、「國富論」を通して經濟政策的、乃至社會政策的問題に對するスミスの態度を探らんとする場合にも、哲學的思惟によつて構成せられたる特定の世界觀がこの著作の背後に藏せられてゐることに、特別の注意を向けなければならぬ。この世界觀はスミスに於いては經濟的調和説となつて現はれてをり、凡ゆる人爲的な政策はここから終局的に拒否されてゐるのであるが、我々は順序として先づ、スミスに於ける社會及び國家觀の何であるかを見ることにしよう。

スミスによれば、社會は、もとより階級社會ではなく、さらばとて又個々人の上に立つ一個獨立の統一體とし

ての社會でもなくて、個々人の單なる集合體すなはち集合概念 *Summenbegriff* としての社會であつた從つて國民經濟の概念も一個の統一體としてではなく、寧ろ利益を追ひ求める個別經濟者の集合體として解された。社會的な經濟現象、例へば市場・價格・分配等は、個別經濟者の利益追求及びかかるものとしての經濟行動より機械的に生ずるところの結果に過ぎない。それ故にこれ等の諸現象に人爲的な干渉を加へんとする何れの經濟・社會政策も、必ず或る特定の經濟集團の利益を不當に増し、他の集團の利益を不當に害する結果とならざるを得ない。さらに國家は、もし經濟政策に携はるとせば、自己に課せられた職分の限界を超えることになる。すなはち國家は、經濟生活に對し何らかの積極的な干渉を加ふることによつて、或る特定の經濟集團の利益の用具になつてしまふ虞れがある。國家は謂はば社會契約に過ぎぬものであつて、この社會契約の内容が國家の取るべき任務を規定する。かくてスミスは周知の通り、國家の任務を國防・治安・及び公益施設の三つに限定した。これを越ゆるは惡である。さうして此の訓令が遵守されるならば、「自然的自由の明白にして簡單なる體制」がおのづから成立すると云ふのである。

これによつて見れば、スミスをしてすでに一切の意識的な經濟干渉に對して否定的態度を表明せしむるに至つたのは、十八世紀の啓蒙論者達に遍通したる個人本位の社會・國家觀であつた。しかしながら我々の中心題目——スミスに於ける經濟理論と社會政策との關聯——によつて、更に決定的な重要さを持つものは、經濟過程に關するスミスの法則すなはち經濟の理論的認識そのものの性質である。スミスの世界觀はここにも躍如として現はれるのである。

經濟生活の究明に當つてスミスは先づ、現實にはなほ實現されざる國民經濟の一理想像を設定し、そしてこの理想像への道は經濟法則の認識によつて示されると考へた。謂ふところの理想像は經濟的調和——個人の利益と社

會の利益との完全なる一致に外ならないが、これを實現するための道は、經濟事象に内在する合則性のうちに横はつてゐる。すなはち恰かも自然現象が一個の統一的法則によつて秩序整然たる運行をなせるが如く、經濟生活も亦た究極的には同様なる一個の統一的自然法則の支配下に服してゐる。従つてこの法則は妨げられずに作用する場合、具體的に云へば個々人の利己的行動と自由競争とが完全に發動せしめらるる場合に、はじめて經濟・社會生活の調和を齎らすと説くのである。スミスはここで、經濟生活にはそれを支配し嚮導するところの恒久不變の自然秩序があり、それが多少とも實現された現象形態が歴史上一定の經濟様式に外ならないと見てゐる。これをフイジオクラット流の表現で云へば、スミスは一の「自然秩序」Ordre naturel—すなはち經濟生活の調和に導くものにして何ら外部からの干渉や制限によつて妨げられざる經濟の自然秩序と、それから「現實秩序」ordre positif—すなはち人間通有の不完全さや知識の缺如や不正義によつて自然的・調和的秩序を缺陷だらけに實現したに過ぎざる具體的・歴史的秩序と、を區別した。そしてこの不完全なる現實秩序をか最も望ましい自然秩序に接近せしめ、以て調和ある社會を實現せしめ得るのは、人爲的・計畫的な經濟施設によつてではなく、實は唯だ經濟法則の自由なる發現を許すことによつてのみ可能である。干渉を加ふること多ければ多き程、經濟は益々不自然となり、非調和的とならざるを得ない。かやうにしてスミスによれば、「自由經濟」の促進以外に、すなはち競争の自由と商業の自由との原則の實現といふ意味以外に、いかなる經濟政策も全然存立の餘地を有し得なかつたのである。

謂はゆる「見えざる手」invisible handによつて導かれるといふ調和の理説は、スミスの全經濟思想を貫流するところの縦糸である。經濟政策上の「自由放任主義」はここに其の世界觀的根據を有してゐる。我々は更に進みて、かかる觀點から説き出でたるスミスのより具體的な經濟理論に向はねばならない。

スミスによれば、企業を中心とする經濟社會に於いては、個々人は彼れの欲望を充たさんがために、市場に出でて交換を行はねばならぬ。市場に於いては彼は、その本來の努力に従つて、出来るだけ高く賣り、出来るだけ安く買はんと努めるであらう。個々人の富の源泉はそれ故に、彼が市場に齎らすところの交換價值の總計でありこの總計が又一國民の富を構成する。従つて交換價值を有する財貨、しかも市場に適したる物質的財貨を造出するところの勞働のみが生産的である。かくしてスミス經濟學の中心點には交換價值の問題が、すなはち社會經濟に於ける決定的現象たる價格形成の理論が、立つてゐるのである。しかるに一國民經濟の生産收益に對する個々人の分け前、これも亦たスミスによれば、市場に齎らさるる財又は用役の交換價值すなはち價格によつて決定せられる。だが、すべての財は結局三つの生産要素―土地・資本・及び勞働―に分解されるから、これら三要素は同時に一切の所得の終局の源泉となる。すなはち價格形成の原理に従つて國民經濟上の全收益は、その所得の源泉に基づいて區別されたる人口の三階級―地主・資本家・及び勞働者―に分配せられる。分配問題もかくしてスミスに於いては價格形成の問題に歸着するのであつて、一切の社會政策的問題は分配の事實に、従つて結局は價格形成の事實に關聯するのである。

スミスによれば勞働力は何れの經濟財とも同様に、その「自然價格」と「市場價格」とを有してゐる。謂はゆる自然價格は財の生産に要したる費用價格（生産費）であつて、個々の經濟者が自己の利益のみを追ひ求めるところの自由競争の作用によりそれは「いはば一切の商品の價格がそれに向つて落着くところの中心價格」を成すものである。これに反して市場價格は事實上市場に成り立つところの價格であつて、供給と需要とにより、すなはち商品の存在量と支拂能力及び支拂意思を有する有效需要の大いさとの關係によつて、一義的に決定せられる。換言すれば市場價格は供給と需要との與へられた量的關係のもとでは―マックス・ウェーバーの表現を藉り

つゞけば——„So — und — nicht — anders — Gewordensein“ 「やうなつたやうにしかなり得なう」ものである。従つてここで決定される価格は唯だ一つしか存しない。これがスミスに於ける一般價格理論の基本性格であるが、これに照應して勞働力の自然價格と市場價格とは次のやうに說かれる。

勞働力の「自然價格」は専ら「勞働の生産費」から構成せられる。分業に立脚する經濟社會に於いては勞働力の自然價格は次の事實、すなはち「人間は常に彼れの勞働によつて生きねばならず、従つて彼れの勞賃は少くとも彼れの生計を支へるに足るものでなければならぬ」といふ事實が、決定的である。生産に際して投ぜられた費用の回收が一切の商品の自然價格を構成したと同様に、ここでも亦た勞働力の生産に要する費用の回收がその自然價格を構成するのである。しかるに他方、「市場價格」は勞働力の供給量と需要量とによつて決定せられる。供給量は市場に現はれる勞働者の數によつて確定され、需要量は價值増殖を求める資本の狀態によつて與へられる。従つて市場價格たる現實の勞賃の高さは、供給の側から云へば勞働者の數と反比例し、需要の側から云へば資本の大きいと正比例することになるが、事實に於いては兩側からの影響を受けて結局、供給が需要を超え、場合には勞賃水準は低下し、反對に需要が供給を超える場合には勞賃水準は上昇する。そしてその結果はやがて又原因となつて、勞賃水準の上昇は勞働の供給量を増加せしめ、水準の低下は供給量を減少せしむるの反作用を惹き起し、かくて「市場價格」はおのづから「自然價格」に接近する傾向を呈する。ところが、この一聯の諸作用のうち最も悲惨なる結果を人間社會に演出するのは、供給が需要を超え勞賃水準が低下することによつて再び供給量が減殺されねばならぬ場合である。「すべての動物種族は——とスミスはいふ——その生存資料に比例して増殖し、決してそれを超えては増殖し得ない。しかし文明社會では生存資料の缺乏はただ下層階級者の間に於いてのみ人間種族のより以上の増殖に制限を置き得るものであり、そしてこの事は、この階級者の結婚が産み出した

子供數の大部分を死に至らしむることによつて達せらるるの外はあり得ない。」(Wealth of Nations, Cannan's ed. rep. p. 79)

これによつて明白となることは、たとへ一時的にもせよ勞賃の高さ、すなはち勞働者に歸するところの國民經濟的全生産物の分け前の大いさは、勞働力の供給量が減少するか或ひはその需要量が増加するかの場合にのみ、高め得られることである。それ以外に勞賃の高さを高め得る道はあり得ない。ひとりアダム・スミスだけでなく古典派諸學者はおしなべて皆、みづから樹立した經濟法則のために、この方向に於ける狹隘且つ消極的な結論に到達して苦しまざるを得なかつた。しかしスミス自身は幸ひにも、市民的生産方法のなほ成長せざる、いはばこの生産方法の黎明期に存命した。彼れの時代は、彼れ以前の數世紀以來進行しつつあつた原始的蓄積がなほ眼前に認められた時代であつた。「蓄積せよ、蓄積せよ」といふのが、彼れの時代に最も相應はしい標語であらねばならない。それ故にスミスは、すでに市民的生産方法がその必然的諸結果を現出した時代のマルサスとは異なつて、勞働人口の制限にではなく、勞働需要の増加に、すなはち資本の増加に、勞賃水準の上昇の可能性を見たのである。これスミスが「勞賃で生活する者に對する需要は明かにただ、勞賃の支拂に向けられたる基金の増加との比例に於いてのみ増加する」。「これなくしては勞賃は絶対に増加するを得ない」と云ふ所以であつて、實際の勞賃は勞働需要量の増加なしには、それ自身價值増殖を求める資本の増加なしには、全然増加するを得ないといふのである。

これを總じて、我々はアダム・スミスに、社會政策的問題の發端をさへ見ることが出来なかつた。第一に彼は社會を利己的個人の集合體と見、この個人の自由なる行動に何らの干涉を加へざることを國家の理想と考へた。いはば國家は、スミスによつて完全に經濟生活の背後に押しやられたのである。第二に彼は、經濟法則を自然法



則と考へ、この法則の自由なる發現を許すことによつて社會の最も望ましい状態、すなはち社會の自然秩序を現出せしめ得ると考へた。そしてこの經濟法則の認識には、妨げられざる個人利益の追求はおのづから、機械的に、社會の利益と一致するといふ經濟的調和のドグマが根柢に秘められてあつた。第三に彼は經濟學の中心點に價格形成の問題を置き、分配問題をも價格問題として取扱つた。従つて勞働階級の受取る價格たる勞賃の高さをも、需要供給の一般價格法則から説明し、しかもこの現實の價格（市場價格）は永きに亘つてその自然價格から乖離し得ざる所以、そしてこの價格過程は他の一切の經濟過程に於けると同じく何らの人爲的な制限も助成も加ふべきではなく、また加へんとしてもこれを效果的に果し得ざる所以を説いたのである。――社會政策は世界觀の上から、及び經濟理論の上から完全に否定せられてゐる。スミスにあつては、社會政策は理論的にも成立の餘地があり得なかつた。それはしかし、産業革命の前夜に「諸國民の富の性質及び原因」を研究主題としたスミスにとつては、まことに餘儀ないことである。彼は何よりも先づ、新興市民階級の活動の物質的條件として國富の増進を、資本の蓄積を奨励し、他方その活動の精神的基礎付けとして利己的活動の自由を、國家による干涉の無用を、永久の調和を、不變の自然法則を、説けばよかつた。眞實の分配問題・社會問題には、彼れ以後の自由主義諸學者が初めて當面するのである。

### 第三節 マルサスとリカアドウ

嚴密に云へば、マルサス(Thomas Robert Malthus 1766—1834)及びリカアドウ(David Ricardo 1772—1823)がそれぞれ主題とした經濟上の理論問題及びその取扱ひ方は決して同一ではない。そればかりでなく、マルサスは社會政策的問題を詳論したけれどもリカアドウの主著には本來社會政策的性質を有する論述が殆んど見出され

得ないやうな相違が、兩者の間に存してゐる。にも拘らずマルサス及びリカアドウを合して此處でその所説の一端に觸れるのは、兩者は略ぼ同時代に思索を進めその理論體系には切り離し難い内的關聯があり、しかも兩者は相合して謂はゆるマンチェスター主義の經濟政策に決定的な方向を與へるに至つたからである。

マルサス及びリカアドウに於ける經濟法則は、本質的にはスミスに於けると略ぼ同一の性質を持つてゐる。だがスミスに於いては、經濟學はなほ明白に哲學的地盤の上に立つてゐたに反し、特にリカアドウはその自然科學的・機械論的性質を極端に押し進め、精神科學的性質を有する何れの知識にも依據することなく、經濟現象をそれ自體として純粹に、原因及び結果の範疇に於いて考察しようとした。この意味に於いてリカアドウは最初の沒哲學的經濟學者であつた。従つて彼はスミス流の調和論から出發し得なかつたが、このことは我々の社會政策的問題に對してもスミスとは聊か異なつた態度の表現とならざるを得ない。すでに我々はスミスに於いて、人口運動と勞賃形成の法則との關聯、すなはち後者の法則が前者の行程を機械的に、しかも事情によつては強力的に、情け容赦もなく支配するといふことの說かれあるのを見た。けれどもスミスに於いては結局、調和への獨斷的信仰が支配してゐるに反し、マルサス及びリカアドウに於いてはこの信仰に全く異なつた方向が與へられる。彼等にあつても亦た、個別經濟者の自由競争は供給と需要との間の考へ得る限りの最善の均衡——スミスに於ける調和（但し彼等はもはや此の語を用ひない）——を意味する。しかしこの均衡は需要の、及び結局は欲求者の、強力なる剿絶によつても亦た齎らされ得る。かくて彼等は初めて、近代の意味に於ける貧困及び失業の問題に衝き當るのである。

さて、この問題に對するマルサス及びリカアドウの態度を考察するにあたつて、先づ理解せねばならぬのは、彼等の持してゐた經濟社會の發展法則である。彼等によれば經濟社會には二つの根本法則があり、この法則の作

用のもとに經濟的並びに社會的の全發展が行はれる。マルサス人口法則がその一、土地收穫遞減の法則がその二である。これら二つの法則は相互に關聯しながら社會の發展法則として現はれ、ほぼ次のごとき發展線を描つてゆく。――肥沃なる土地が耕作されずに残つてゐる限り、すなはち土地が一の經濟的「自由財」を示してをる限りそこには未だ何らの社會的分裂、何らの階級別も存せず、社會的從屬關係は未だ問題として現はれない。土地の廣袤はしかし事實上限られてをり、又やがて收穫遞減法則の支配を受けることとなる。かくて、もしも人口の増加がつねに等しいならば、すなはち人口がその數に比例してつねに同じ割合で増加を續けてゆくならば、土地生産物の増加は人口との比例に於いて益々小となるであらう。しかし、すべての人間は結局土地の生産物から生きねばならぬため、つねに益々劣等な土地が耕作されねばならぬこととなり、かくてより有利なる條件のもとに生産しつつある土地は一の「地代」を生ずるに至る。ここに於いてか、その社會には階級分裂が始まり、地主・資本家・及び無産労働者の三階級がこの發展法則の作用下で成立する。そしてこの三階級は、マルサス及びリカアドウが事實眼前に見たところの社會的階層でもあつた。人口運動はかくて經濟的並びに社會的發展の本來の推進力として現はれるのであり、従つてこの點から社會問題は理解されねばならぬといふのである。

ところで此等の三階級に、市場に於ける價格形成の道を通じて國民經濟上の全生産物は分配されるのであるがその場合に作用するのが需要供給の法則であり、そして常にそれに落着かんとするところの基準となるものは謂はゆる「自然價格」であつて、この價格は一商品の生産に必要とされた労働量によつて決定せられる。しかしリカアドウに於いては、階級は上述の通り三つであるけれども、國民經濟上の全生産物がそれに對して分割されるのは本來三つではなくて、二つの大いさである。すなはち一方には地代、他方には勞賃と利潤との總計、の二つに分割せられる。そして人口が増加すれば――そのことはマルサス及びリカアドウによれば社會的原罪である――生

存資料が騰貴する、だが生存資料が騰貴すれば自然賃銀及びこれとともに實際賃銀も騰貴せねばならず、さうすれば又利潤は低下せねばならない。地代の騰貴と、賃銀（名目）の騰貴と、及び利潤の低落とは、國民經濟的發展の自然的過程である。その結果は次の二つの途の孰れかを進んでゆく。第一の途は、利潤率の漸次的低落のため資本の蓄積が止み、勞働力の需要が減退し、賃銀が低落し、かくて低落せる賃銀に自からを適合せしむるの必要から勞働者階級は何らかの仕方によつてその數を減少せねばならない。すなはち勞働者階級は「貧困の苛酷なる法則の不斷の作用によつて、生存資料の水準下に引き抑へられる」これが經濟的發展の自然的過程から導き込まれる第一の途である。さうして第二の途は、賃銀と地代との分け前の上昇によつて結局、利潤が全く喰ひつくされ、かくて資本主義社會がその終焉に近づくといふことである。この途はもとよりリカアドウやマルサスの夢にも豫想しなかつたところであるが、特にリカアドウの學說からこの豫想外の歸結が出で來たることを説いたのはドイツ學者ブリーフスの功績である（Briefs, Untersuchungen zur klassischen Nationalökonomie, Jena 1915）。

右に述べた全體的發展はしかし經濟上の中心法則たる需給の法則によつて、價格形成の法則によつて、すなはちマルサスが名づけていふところの國民經濟の「第一の、最大の、そして最一般的なる法則」によつて導かれる。この價格形成の法則から、經濟的・社會的諸現象のすべてが宿命的な必然性をもつて、及び同時に數量的な正確さをもつて現はれる。従つてマルサス及びリカアドウによれば、分配問題も亦た數量的に一定した原因の結果として、他の經濟現象と同一の必然性と正確さをもつて決定されざるを得ない。すなはち勞働力の價格たる勞賃は、現實には、市場に於ける勞働力の供給と需要との量的關係により、云ひかへれば、一方に於ける勞働者の數と他方には勞働者の就業を求めるところの資本の量とによつて、決定せられる。しかし現實の勞賃がこの量的關係によつてその自然價格以上の點で決定されることがあつたとしても、それは直ちに勞働人口の増加を誘發

し、やがて再び自然價格のほとりに自からを落着けるに至る。かくて勞賃の高さは、「自然と慣習とが勞働者の維持に必要とする額を遙かに超えることは決してあり得ない」といふのが彼等の一致した見解であつた。

この點よりして、彼等が當時の救貧法に對して取つた態度及びその論據も明かとならう。リカアドウは「經濟學原理」中の勞賃の章に於いて、マルサスは「人口原理論」(第二版以降の形態に於ける)第三編に於いて、いづれも詳しい批評を救貧法に對して加へたが、彼等によれば、かかる仕方では貧民を保護することは、實は資本の側からの必要なためその勞働力は交換價值を有たざるところの、すなはち何らの價格、何らの勞賃をも獲得せざる如き、いはば無用の人間を保護することに外ならない。かかる法律的保護はすでに次の一事、すなはち「貧困の鐵則」(マルサス)がするやうに人口の増加を抑制しないことによつて有害である。蓋し「人口が生存資料を壓迫せる如き場合には、救治手段はただ人口減少か或ひはより急速なる資本増加かである。だが、すべての肥沃なる土地がすでに耕作し盡されてをる如き國々では後の手段は行ひ得ないもの、且つ望みをかけ得ないものである」(リカアドウ)。貧民の保護救済は決して生存資料そのものを増加せしめない。従つて「これ等の人間がより快適に生活してより大なる生存資料を喰ひ盡すことになれば、他の人間への分配のための生存資料が益々減少するに至るのは明白の事理である。すなはち斯くなれば各人の要求は價值に於いて低下し、同量の銀塊は生存資料のより少き量をしか購ひ得ぬこととなり、生存資料の價格は一般に騰貴するに至るであらう」(マルサス)。名目賃銀の引上げもおのづから同一の結果を齎らす。すべてこれ等の方策は「子供ぢみたもの、效果なきもの」(マルサス)である。價格のかかる騰貴によつて、今迄は貧困でなかつたものも貧困状態に陥れられ、この範圍は益々擴大せざるを得ないのである。

かくて我々はマルサス及びリカアドウに於いて、何故に社會政策的諸施設が拒否されざるを得なかつたかを知

つた。一言でいへば、經濟法則は彼等に於いては恰かも自然法則と同様に作用するため、これに干渉を加へるあらゆる方策は效果なきもの、意味なきものと見たのである。國民經濟上の全生産物の分配はまた價格機構を通して行はれるため、たとへこの生産物の分配にあづからざる人間（貧民・失業者）が居るとしても、この價格形成の事實を批判してはならない。問題とすべきものは寧ろ人口數の多寡である。人口數は供給であるから、勞働の價格を高めんとすればこの供給さへ減ずればよい。經濟が悪いのではない、否な經濟は悪いとも善いとも云ひ得ないもの、經濟はただ在るのである。これに反して惡は、人間の多すぎる點にある。―およそかくの如きが、マルサス及リカアドウが社會問題の基礎に對して加へた診斷であつた。しからばこれを救治するの途は何であるか。それは斷じて、外部から經濟を統制せんとする何らかの方策ではない、これに反して高々一種の社會教育である、と彼等は答へた。かくて彼等は、人口増加に關する「勞働者階級の慎重なる慣習」（＝謂はゆる道德的抑制）を養成することをもつて、社會改良の殘されたる唯一可能の途と考へたのである（舊拙著「人口法則と生存權論」第四篇及び第五篇參照）。

我々はここでマルサスの人口理論やリカアドウの分配理論にこれ以上深く立入らない。以上の考察からすでに次の事實が明白だからである。すなはち古典派諸學者の學論に於いては、おしなべて、經濟現象の諸法則は自律的・自動的に作用する機械的な法則と解せられてゐたこと、さうしてスミスの場合ではこれに干渉を加へる一切の社會政策的施設は謂はゆる調和の觀點から不正のものと見られたるに反し、その後繼者二人の場合では調和はもはや説かれず、純粹の經濟學的觀察からそれらは不條理のものと見られたのである。しからば最後に古典派の殿將ジョン・ステュアート・ミルはこの問題に對して如何なる態度を取つたか。

#### 第四節 ジョン・ステュアート・ミル

ジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill 1806—73) の「經濟學原理」は古典派の彼れの先行者達が行うた研究結果に對し、嚴密には新しい何物をも附け加へなかつた。その理論的認識に於いては、彼は寧ろ古典派の集成者或ひは完了者として現はれる。「原理」の獨譯者ヴェンティヒ (Wentig) はまさしくも彼を評して「經濟學研究の一期間の總決算」と云うた。事情すでにかくの如くであるから、彼がその理論から社會政策的諸方策の可能性なり必然性なりを基礎づけ得なかつたことも亦た當然である。社會政策的問題はしかしながら、彼に至つて非常に近代的な形相をもつて現はれ、彼はこれに眞剣なる省察を加へないわけには行かなかつたのである。

何よりも先づミルは勞働組合の賃銀政策及びその効果を、リカアドウから繼承せる賃銀基金説の遵奉者として論じた。しかしその態度は極めて懷疑的であつた。マルサス及びリカアドウが人口法則から抽出したところの社會政策的結論を彼は完全に踏襲し、そして、必ずや失敗に終るべきストライキが勞働者みづからに、結局は需要供給法則のいかんともしがたき威力を意識せしめるに至るであらうことを望んだ。かくて彼は、マルサス及びリカアドウの線に沿うて、勞働階級の人口政策的教育を要求し、この階級がみづからを救ふの途は詮ずるところ、その數の供給を減少せしむるより外にないことを論じたのである。尤も彼はこれを救済する一つの方法として大仕掛けの海外植民を提唱した (附言するが、ミルの前半生の職業は東印度會社の役人であつた)。だがこの方法も、かの最重要なる國民經濟的法則たる土地收穫遞減の法則に衝き當つて僅かにこの法則の作用結果を一時的に前方に押しやり得るにすぎない、と彼は見た。従つて「社會政策的」要求の主なる内容は、ミルに於いても亦た

經濟法則の認識を促進するための個人の教育に歸着したのである。

後半生に於いてミルは徐々に、しかも時には後退もしながら、社會主義的見解に接近する。そして社會主義實現の可能性をも信じ、部分的には社會主義の經濟的發展理論をも承認する。これは彼れの生涯に於ける劃期的な出來事であつた。同時にそれは、社會情勢の變化にもとづく自由主義學派全體の不可避の運命でもあつたと云ひ得よう。ミルの、かかる思想上の轉換は普通に、彼が當時フランスに勢力を張つてゐたサン・シモン(Saint-Simon 1760—1825)一派の社會主義を研究したこと、及び後にミル夫人となつたテイラア夫人(Mrs. Taylor)の思想的感化とに因るものとされ、ミル自身もその自敘傳でこのことを告白してゐる。特に「經濟學原理」の理論編に相當する部分の最終の一章(第四編第七章)たる「勞働者階級の將來の豫想」“On the Probable Futurity of the Labouring Classes”はテイラア夫人の忠言により、しかも一説によればその一部分は彼女の口述をそのままに寫し取つて、後の版本に於いて新たに挿入されたものに屬するのである。この挿話はしかし單に、ミルの側に於ける主觀的事情を物語るに過ぎぬ。客觀的には社會情勢の變化にこそ我々は、ミルをして社會主義に近づかしめた主原因を見なければならぬのである。

それは兎もあれミルは社會主義實現のための主問題を、共同組合的精神の教育に見、しかもこの組合が勞働者の物質的生活の向上に役立つ利益は、それが彼等の道德心の向上に役立つ利益に比すれば寧ろ些々たるものであると考へた。そこが、なほ過渡期にあるミルのミルたる所以であつて、一面には社會組織の根本的改變の可能を信じながら、しかも他面、この組織の改變は人心の改善を伴はねば意味をなさぬとするミルの、保守的・理想主義的見解が横たはつてゐるのである。この故にマルクス(Karl Marx 1818—83)はミルを評して「半ば眼醒めた經濟學者」と稱したわけである。ミルに於けるこの新しい立場はすでに、彼れの經濟理論の枠内では水に注



げる油のごとく、矛盾なしに納まり得るものではない。他方またミルは政策論の最終章（第五編第十一章）に於て「自由主義の限界」「Limits of the Laisser-faire Principles」を論じ、彼れ特有の國家理想や倫理的觀念に基づいて少なからぬ社會政策的論述及び提案を行うてゐるが、これも彼れの經濟理論と矛盾せざるを得ない。蓋し彼れの經濟理論は當然に自由主義と結びつくものだからである。まことにヴェンティツヒの評せる通り、ミルはかくの如きものを「最も深い根據に於いては寧ろ書くを得ざるものであつた。蓋しそれは、全著作の枠外にはみ出てをる外體であり、或ひは外から採り入れられたる思想である。彼は、これらのものを科學的に基礎づけることによつて經濟學上の一の全く新しい傾向が要求せらるるに至るべきことを明白に意識することなく、その正當さを確信してゐたのである。」

以上のことは、ミルが、従つて古典派經濟學全體が、その胎内から新たな科學的方向——「科學的社會主義」が發足するところの、一の重大なる轉換期に立つてゐたことを示す。しかしミルは既述の通り、「經濟學原理」の關する限りでは飽くまでも古典派の完成者として終始し、眼前の社會事實に照らしてみづから意識するに至つた古典派理論の破綻を取り繕はうと努めた。従つて我々は社會政策と經濟理論との關係についてもミルからは本質的に異なつた何物をも學び取り得ないのである。

自己の經濟的地位を高めんとする利己的行動の動機以外のものはすべてこれを捨象して専ら機械的・因果的な經濟法則を樹立しようとした古典學派の研究方法に對して、ミル自身の持つ特徴的な方法は、國民經濟上の實際生活の觀察から認識を獲得せんとしたことである。これは抽象的なテオリイ（理論）を重視して現實のレーベン（生活）を無視したりカアドウに比すれば確かに一つの進歩であつた。だが、それにも拘らずミルは、依然リカアドウの衣鉢を繼いで自然科學的意義に於ける因果的取扱を行ひ、それ以外の一切の認識を精密ならざるもの、

科學的ならざるものとして全然考察の範圍外に捨ててしまつた。一切の事實認識は、それらが科學的であり得るためには、複合せる諸原因の一義的な作用として現はれねばならない。すべての社會的事實はミルにとつて、かかる複合原因の結果であるが、それらの原因は結局、つねに人間の本性に歸せしめられ得るものである。それ故に社會的合則性の認識、云ひかへれば經濟法則は、最初は「社會生活の經驗的法則」たるに過ぎないが、それが人間自然の、しかも個別的に觀察されたる人間自然の法則として現はれる場合に、はじめて科學的意義に於ける精密法則の威嚴を獲得するのである。經濟法則も實は單に個々人の富に對する努力にのみ還元し得るものではなく、はるかに複雑な事情の上に立つてゐる。だが、富に對するこの努力は甚だ重要なものであつて、それから生ずる合則性は眞理に最も近い。もとよりそれ等は、現實に適應するために種々なるモディフィケーション（粉飾）を受けねばならない。すべての他の共働する諸原因はしかし、一の機械的・因果的な法則のモディフィケーションたるに過ぎず、毫も本質には觸れないのである。

ここに於いてミルは經濟學上の二個の法則を區別する。一は生産の自然法則、他は分配の法則であつて、後者は「専ら人的制度」に係はつてゐる。すなはちミルは分配の觀察に當つては一定の社會的前提——「私有財産」と「自由競争」と——を顧慮せねばならぬと云ふ。けれども彼はこの事から、經濟は社會的現象であり、従つて孤立的には觀察すべからざるものであるとの論理的歸結には達しない。彼が進みて、分配は自由競争の支配しないとここでは「その社會の法律と慣習とに」依存すると説く場合でも、右のごとき結論には達しない。何故ならば、彼れの見るところでは、ここでは亦たその結果は全然機械的・因果的に決定されるからである。社會の法律制度は個々人の行動を規制することは出来る、しかしこの行動の結果、従つて社會的經濟現象はこれを支配し得ない。ミルは、この意味に於いて、政策的提言をなすことは全く正しいと考へる、だがその結果はこれを保證し得

ない。蓋し複合せる全原因を一望のもとに集めること、及びこれを科學的に把握することは不可能だからである。

ミルの所説のうち我々の問題にとつて特に重要なことは、右の一般的法則觀よりして彼が、多くの商品の價格が法律や慣習によつて規制され得るといふ事實を認めてをる點である。この事實認識を彼が若し理論的に一貫して價格形成の社會的側面を強調するに至つたならば、彼はおそらく古典學派中の最初の人として政策學的認識の基礎を掴みとり得たであらう。しかしミルはそれを爲さなかつた。むしろ反對に彼は、商品の價格がその時の社會の法律及び慣習によつて規制されるといふ場合を制限した。すなはち勞賃はその例外をなすものであつて、勞働は、その價格が「需要供給以外の何れのモメントにも決して依存しない」ところの商品に屬し、これに對してはいかなる統制の可能性もなく、ただ僅かに勞働人口の制限がこの場合訴へ得る唯一の殘されたる道であるといふ、かの、古典派傳來の消極的・保守的結論に達したのである。

かくてここにミルの「經濟學原理」の結末を示すものとして、自由放任主義を提案せる次の言葉がある。曰く「略言すれば、自由放任は一般に實行されねばならない。およそこれから離れることは、或る大いなる善によつて要求される場合のほかは、一つの惡である」と(J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, Ashly's ed. p. 350)。この一言にこそ、人は、ミルに於いて理論と實際的提案との間に見出されるところの、いはば一切の矛盾が含まれてゐるのを見るであらう。蓋し經濟的諸過程の法則は、自然法則の意義に於いては一義的・機械的に決定される結果に導く。さうすれば「自由放任」"Laisser-faire"のほかに如何なる他の道も殘されてゐない筈である。それ以外のいかなるものも欺瞞であり、惡である。これはミルの法則よりする當然の論理的歸結であつて、經濟法則を本質的に尙ほかかる意味に解する限り、いかなる積極的政策を提案することも論理の矛盾である。しかしな

がら彼が事實上さうしてをる通り、一方にかかる法則を認めながら他方に何らかの實際政策的論述をなし、そしてその政策の効果を期待してをるとすれば、經濟法則はもはや自然法則的性質を有するのではなく、むしろ社會的諸制度により諸慣習によつてその具體的形態が決定されるものと云はなければならぬ。さうすれば、今度は「自由放任」が欺瞞であり、經濟統制が一切の歴史上の經濟の本質的構成部分となる。かくてその何れの道を選ぶとしても、ミルの思想體系は自家撞着を免がれ得ないのである。

## 第五節 綜

### 括

以上我々は、イギリス自由主義經濟學の歴史的・社會的地位の考察から始めて、この學派を代表する四論者の各々につき社會政策と經濟理論との交渉一般を、すなはち彼等はそれぞれの經濟學體系中に於いて社會政策的問題をいかに取扱つたか、を概観したのであるが、これによつて我々の學び取つたところを簡略に摘録すれば次の通りである。――

古典學派に通じたる經濟過程への非干渉主義の根本原則は、まづ最初は社會の本質觀から、すなはち集合概念としての社會概念から、及びその上に立てられたる國家理想乃至社會正義の觀念から採用せられた（スミス）。次いでこの原則は、自然法則としての經濟法則の認識から、すなはち一切の社會政策的干渉は經濟の本質と矛盾しその過程の合則性を攪亂するといふ意義に於いて固守せられた。力は、經濟を規制もし得なければ改善もし得ない、それはただ經濟を破壊するものであると云ふ。かくて「自由放任」の根本原則は、今までの社會的正義の要求からは獨立して、より確固たる理論的基礎の上にうち樹てられることになつた（マルサスとリカード）。さうしてミルに至つては、依然この原則は維持されようとしたけれども、これによつて彼は遂に意識的或ひは無意識

的に——意識的にといふは彼が社會主義に近づいたこと、無意識的にといふは彼れの「原理」が矛盾に陥つたこと——古典派の伽藍を揺がすべき破綻をみづから犯すに至つたのである。

いまや學問歴史の舞臺は別派の登場を要望しつつある。と云はうよりも、現實の社會情勢はこの間に全く一變した。「自由經濟」はその行くべき所に行きつきはしたが、善人のスミスがその必然の到來を信じて己まなかつた社會調和の理想境へではなく、それとは正反對の社會對立へであつた。この社會對立はマルサスやリカアドウがすでに當時、その初端的形態に於いて眼前に見ることは見たが、しかも彼等の敎説と期待とを見事裏切つて、資本の蓄積のためには敢へて自からの利益の犠牲を忍ばねばならなかつた筈の勞働者階級は、年とともに反抗の意思と力とを増して來た。他方、資本家的生産方法は自由競争と世界市場とを基礎として益々向上的發展を辿りはしたが、弱肉強食の自然鬭争をそのまま人間社會に示現するが如く資本と經營とは益々少數の大資本家の手中に集まり、かくて自由經濟は急速度に「獨占經濟」への轉化を行ひはじめた。國家は今まで自由主義學派の信條に従うて袖手傍觀、ただ徒らに經濟生活の背後に押しやられてゐるに過ぎなかつたが、資本主義が獨占段階にさしかかるや再び呼び出されて前面に現はれ、獨占資本主義との緊密なる聯繫を現はしはじめた。勞働者の反抗と組織またこれに應じて強度を加へ、十九世紀前葉の西歐諸國の社會不安は未曾有の深刻さを示して來る。——自由主義學派に於ける經濟法則の本質を批判することに於いて、次いではこの批判にもとづき社會政策學の樹立を行ふことに於いてその學問的役割を果すべきドイツ歴史派經濟學は、他面また如上の社會的情勢の急變化を背景としてゐる。故に我々は次の機會に於いて引續き、歴史派出現以前に於ける勞働運動及びその指導理論の諸體系を考察することにしよう。